

## 【時雨と動物】

時雨という語の内容は、本来は近畿の特徴的な自然現象である。季語はある意味ですべて地貌季語であり、近畿の地貌季語がたまたま北九州から関東までほぼ同じような緯度なので一般化したのではないか。近畿の時雨は、こちらは冷たい霧雨のような雨でも、少し離れたところをみるとあちらは晴れている。こうしたことは近江に引越してきてしばしば経験するのである。関東で20数年過ごし、関東平野もよく歩いたがこの経験はない。杜国の「驚ぬれて鶴に日の照る時雨かな」（杜国は尾張の人で、この句がどこで作られたのかわからないが）や蕪村の「馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ」は京あるいは近江の時雨の特徴をよく表している。両句の構造は全く同じであるが、これが紋切り型とは思えないのは、杜国が見事に近畿の時雨の特徴を捉えたことに蕪村が見事にまた応答しているように思えることである。鷺と鶴、馬と牛のそれぞれの動物の対比と日照と時雨という場所の対比のおもしろさにそれが表れている。俳諧・俳句は時を超えた自然との対話であり、時を超えた人間同士の共感の文学でもある。